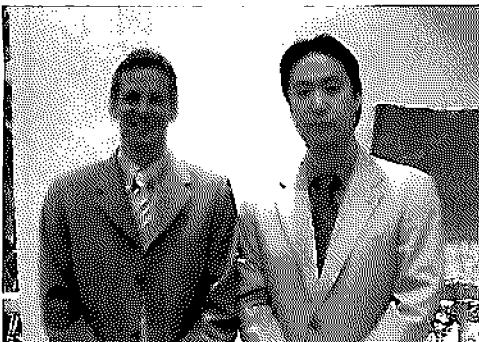


ドイツからの便り

日本基督教団教師
ドイツ留学中

上田 彰



この夏日本から友人が泊まりに来て、朝の祈祷会の時に、実際に15ヶ月ぶりに声に出して共に日本語で祈りました。今更のように教会というのは声にして祈る共同体であることを思い出し、同時に日本の教会のことを重ねて思い起しました。

私が住むここエキュメニカル・インスティチュートは30弱の国籍も教派（一部他宗教含む）も様々な共同体です。ヨーロッパ特有の個人主義の中にも暖かさがあふれています。特に監督でもあるフェルナンド・エンス氏（写真左）は大変にお世話になりました。エキュメニカル運動に詳しい氏を通じて、合同教会にはいる私たちがエキュメニカル運動には明るくないという事実（私だけかも知れませんが）を

思い知られ、こういった運動を通じて教会が健全になっていく可能性を知りました。

通っている教会はハイデルベルク信仰問答で名高い聖霊教会です。ある時、年間50万人の日本人檀信徒向けに伝道を兼ねたトラクトが「ここにあってもいいのではないか」と思いました。

その内の一つは次のようなものでした。私が書いた文章のうちで、本来あまり重要ではないう次のくだりをめぐつてです。

「外見上は常に現状維持がなされてきた教会も、こうして多くの変遷をくぐり抜けて現在に至ります」。ここを指して、「日本では教会は建て替えをするのがドイツの習慣で、そこか

ちました。既存のドイツ語や英語のパンフレットがキリスト教を理解したヨーロッパの観光客向けで、日本人にはじみにくいという判断から、キリスト教に触れたことのない人を急頭において新たに文章を書き起こしてみました。先日それを牧師に見せたところ、いくつかの質問を受けました。

終末に向けて、私たちの教会は教会になるための歩みを続けています。その過程で、教会同士の交流から学ぶことはまた多くあるでしょう。しかし、歴史形成に耐えうる教会をなお太く持ち続ける必要があるためには、伝道への志があります。伝道する教会への志をまとめ上げる神学の不在」が起きているのではないでしょう。

日本では「たこつぼ現象」（教会を建て替えるのがドイツの習慣で、そこか

らすると日本で町の外観の変化に合わせるかのように教会を建て替えるのは理解できな

いようなのです。そこで私は、日本ではキリスト教は新興勢力で、プロテスタントの場合たった150年しか伝統がない、教会が街作りの最初にあるという風にはなかなかならないのだと説明しながら、「そうか、日本の教会の伝統はとても短いのだな」と改めて気がつきました。

ドイツの神学界は今曲がり角にいます。モルトマンやユンゲルといった巨人が現役世代にはいなくなりました。神学的関心を一手に集める巨匠がいなくなつたということは、言い方を変えれば神学的基盤が個別化しかけていることを意味します。神学を固有名詞で語るのでなく、学派で語る時代が来たと評する人もいます。

神学・キリスト教書店の販売面積ではドイツに勝る日本でも、実際には同じように神学の「たこつぼ現象」（教会を建て替えるのがドイツの習慣で、そこか

らか、教会堂が歴史を表すよう

つくかというのはドイツと日本

の共通課題です。